

---

# **魔法先生ネギま！ ~片翼の天使の力を得た男~**

夜半

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！～片翼の天使の力を得た男～

### 【NZコード】

NZ8526T

### 【作者名】

夜半

### 【あらすじ】

俺はある『力』を持つている。強大な力。それを手にしたとき人は何を思うのか…。何を成すのか…。正義？悪？そんなくだらないことの為には、俺はこの力は使わない。俺は俺のために力を使う。邪魔をするなら容赦はしない。

## Prologue (前書き)

なかなか執筆が進まないので暇つぶしで書いていたものを投稿します。

よろしくお願ひします。

## Prologue

あの日、俺は全てを失った。燃え盛る家。逃げ惑つ子供達。

地獄絵図とも言えるこの光景を生み出したのは『魔法使い』と呼ばれる者達だった。

古来より日本には呪術士と呼ばれる者たちがいた。しかし年月が経つにつれ、その勢力は衰え、逆に魔法使い達が台頭を始めた。

そして、いつしか日本はその国土を二分する形で、西に呪術士、東に魔法使いという勢力図が出来上がったのだ。

そして、俺たちはその一大勢力の争いに巻き込まれたのだ。

魔法使いが放つた魔法が流れ弾となつて孤児院を直撃したのだ。

結論から言つと、孤児院は全壊。孤児院にいた職員、子供は俺を除いて全員死亡。俺は家族とも言える皆を失つた。

何故、俺は無事だったのか。それは俺が『化け物』だからだ。

昔から俺は変わっていた。外見もそうだが、中身もだ。日本人とは思えない銀色の長髪で、妖しい光を帯びた瞳は氷のように冷たく、人を寄せ付けない雰囲気を醸し出す。身体能力に至つては明らかに常人のそれを遥かに越える。

そして、この日俺は覚醒した。

目の前で一人、また一人とみんなが死んでいき、最後の一人が俺の腕の中で息を引き取つたの瞬間、強烈な頭痛とともに、俺の正体に

についての情報が流れ込んできた。

「ハハハツ！ ハハハハハはははふははははハハハハハはは  
はふははははハハハハハはははふはははハハハハハはは  
はふははははハハハハハはははふはははハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハツツツハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハツツツハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハツツツハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハツツツ！ ！」

俺は人間ですらなかつた。いや、正確に言うなら俺という人間にあ  
る存在の力がそのまま憑依していたのだ。

それはこの世界とは全く次元の違う別世界の存在。

『ソルジャー』の『セフィロス』という存在だ。

それと同時に俺には左翼の翼が生えた。そして左手には2メートルを越える長刀『正宗』があった。

「おこおこ……ビリすんだよ!」

「ふ、知らねえよーお前がやれって叫つからやったんだろ!がー!？」

貴様らがやつたのか……

「黙れ……」

あいつたけの怒氣と殺氣を飛ばす。そして次の瞬間には奴らの前に一瞬で移動する。

「が、ガキが何の用だ……！？」

黙れ。喋るな……！！！

「そもそも、その刀で何をするつもりだ……。俺たちにはそんな刀は通用しないぞつ……！？」

耳障りだ……！！！

「正義の為には必要だつたんだ……！正義の魔法使いの俺たちがああしないと君たちにも危害が及ぶかもしけなかつたんだぞ……！」

黙れ黙れ黙れ黙れ……！危害が及ぶ？ふざけるなよ……！

「貴様らが殺したんだろうが……！」

この日、俺は『家族』を失い『力』を手に入れた。そして、初めて  
人を殺した。

## Episode 1

晴々とした青空の下、いつも通り登校する。

あれから三年が経過し、俺は13になり、麻帆良学園男子中等部に通っている。

あの事件は表向きには原因不明の爆発事故といつことになっている。そして孤児院のみんなはたまたま外出していたことになった。

そう。魔法使いとやらはあるの件を隠蔽したのだ。自分達の都合のいいように。まあ、俺もやることやったから、人のことは言えないが……。

しかし、あの件はまさしく俺の異常性を露顕させた。

俺はあの事件の原因の魔法使い一人を殺した。正宗で斬殺し、死体は能力で消滅させた。しかし、孤児院の原因が一人の魔法使いだとわかるように証拠は残したがな……。

なんにせよ、俺は人を殺した。これは変えようのない事実である。だが、俺はそのことに何も感じない。罪悪感もなにもだ。

これがセフィロスとやらの能力のせいか、俺があの件で壊れてしまつたのかわからないが、俺の精神は異常なことに変わりはない。

「……しかし、あの夢を見るのは久しぶりだ。これは何かの前触れか……？」

あの日以降、俺はマンションを借りて生活している。お金は株で荒稼ぎした。これはここ麻帆良では特に異常とは思われない。良くも悪くも麻帆良大結界のおかげだ。

ここ麻帆良は関東魔法協会という、魔法使い達の本部となつてゐる。いろいろと調べてゐるうちに、かなりね情報を入手できた。挙げればきりがないが、確実に言えることは、こここの魔法使いという奴はどうしようもない馬鹿ばかりということだ。

自分達の『正義』とやらが絶対で融通がきかない。下手な犯罪者たちより力を持つて居る分たちが悪い。

つと、物思いに耽りすぎたな。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアツツ！..」

朝の登校風景にそぐわない甲高い悲鳴が響き渡る。

俺の眼前の交差点で、麻帆良学園女子中等部の制服を着た女子生徒がトラックに轢かれかけている。

「.....！」

考えるより早く俺の体は動いていた。一瞬で女の子を抱え、トランクをかわして交差点を抜ける。

トランクはけたたましいブレー キ音を鳴らしながら交差点の中央あたりで停止した。当然、あたりは騒然となる。

「大丈夫か？」

「あ、ああ」

混乱しているようだが、ケガはないな。この力もこんなときは役に立つもんだな。

「いやあ、すまんかった。大丈夫かい？ ちょっとほつとほつとしてたんだ。大事にならなくて良かったな」

「なつ……！？」

まさしくこれだ。これが学園結界の弊害だ。

「何をヘラヘラしてんだオッサン？なに悪びれずに謝つてんだ？」

これだから腹が立つんだよ。魔法使い達にとつては都合のいい結界  
かもしれないが、ただの一般人には害しかない。自分達の行動の責任  
が取れなくなる。

「本気でそう思つているのか？だったらあんたは人として最低の人  
間だな」

軽く怒氣に殺氣をのせて言い放ち、彼女とこの場を後にする。

「変なところを見せて悪かった。思わず腹が立つてな…」

「あ、ああ別に気にしないから」

「」とにかく麻帆良は嫌なんだよ。あの状況を普通と見てやがる…

思わず愚痴つてしまひ。

「…………

あ……、隣に人がいる」と忘れ…

「お、お前はやつるのが異常だと思つのかー!？」

おおう…、なんか必死だな。

「そりだよな。あれは明らかにおかしいんだ。だいたいあの世界樹が一番おかしいんだよ……」

…なるほど。この子は学園結界の影響がないのか。それにしても彼女は魔法関係者とは思えない。

となると、彼女には確固とした「アイデンティティ」があるのでひつ。自己の意志が強固な者には、この意志を捩曲げる結界はさほど効果がないしな。

「… 苦労したんだな」

思わず呟いてしまった。彼女がこれまでどんな心労を積み重ねてきたかは想像にたやすい。

「俺でよければこいつでも話を聞いてやる」

おそらく気休め程度にしかならないがやらないよりはましだ。所詮自己満足に過ぎない偽善だがな。

「そういえば名前を聞いてなかつたな」

ついでに、俺も教えてないな…。

「は、長谷川千雨だ」

「俺は神代凜。女みたいな名前だがちゃんと男だからな」

これが俺と千雨の出会いだった。

「さて、話を聞かせてもらおうかの」

満天の星空を一望できる麻帆良でも有数の天体観測スポットの一つ、世界樹広場で俺は、学園長近衛近右衛門他十数名と対峙している。

どうやら今朝の一件は魔法使いに見られていたようだ。一瞬でトラックに轢かれかけた女子生徒を助け出した身体能力。得体の知れない男子中学生と認識されたんだろうな。

味方か？はたまた敵か？目的は？どこの組織のものか？

とにかく謎だらけ。だからじりじりじりじりして深夜に呼び出して、おそらく腕利きの魔法使い達を集め、威圧するよにしているのだろう。

正直、馬鹿馬鹿しい。

家に帰つて郵便受けを確認すると、差出人不明の郵便にただ一言、『深夜零時に世界樹広場に来てくれないか?』。

それに応じて律儀にきた俺も俺だが、それ以上にコイシラは理解できない。なぜ、上から田線なんだ? コイシラは俺から話を聞きたいんだろ? つへ。

それなら相応の誠意を見せろって言いたい。しかも到着するなり人を囲つておいて、『話を聞かせてもらおうかの?』。主語がないだよ、主語が。

さて、どうしたものか…。とりあえずはあれだな。

「……あ、もしもし?なんか変な集団に囲まれて、困ってるんです。

助けてください。……ええ、場所は世界樹広場です。できれば早く  
お願いします」

「……？」

まずは警察に連絡。まあブラフだけどな。

実際、変な『自称正義の魔法使い』たちに囲まれてるし。

つーか、何驚いてんだ？。普通だろ。正体も明かさず呼び出して、威圧してんんだから。

「なにか問題でも？実際あんたちは俺に危害を加えようとしてるだ  
ろ」

「それはおぬしの話次第じゃ。神代凜」

「俺の話次第？ついにボケたか爺。あんたのその長い頭には脳みそ  
詰まつてないんだな。何で呼び出されてまで俺が話をしなきゃなら  
ないんだ？話を聞きたいならそつちから出向いて来いよ。それが礼  
儀つてもんだる」

「人前では話せない内容じゃからな」

「それはあんたの都合だ。俺には関係ない。第一、こんな時間に生徒を呼び付けるなんて馬鹿だろ」

日中に聞けばいいだろうが。わざわざ深夜にする必要性は皆無。人に聞かれてたくない話なら、伝家の宝刀、認識阻害魔法を使えばいい。そんなことも気づかないのか？

「俺と話をしたいなら相応の誠意を見せろ」

話すことなんか一つもない。第一、この爺があの事件を隠蔽した張本人だしな。それに、さつきから人の頭を覗こうとしてるし。  
：無駄なことに気づかないあたり、この爺も魔法にかなりの信頼を  
おいでいるんだろうな。それでは、ただの魔法というおもちゃを引  
えられたガキだ。

「じゃあな。俺は帰らせてもらひ。」

実にくだらない。人とは違う力を手に入れて図にのっているのがは

つきりわかる。まあ、爺とあそこの高畠教諭はその辺のことを多少は理解してそうだが、この対応を見る限り、大差はないな。

「……って言つたそばからこれかよ」

帰ろうとしたら俺を囮んでいる奴らがいっせいにそれぞれの得物を構えた。

「ひうらの質問に答えるまではそれは許せんのよ

こいつもって力をちらつかせれば屈するとしても思つてゐるのか？俺があんたより弱いって確証もあるのか？

「これだから嫌いなんだよ……！」

「君の正体がわからない以上、こっちも相応の対処をしなくちゃいけない。だから質問に答えてくれないかな？」

今まで黙っていたくせにこんな状況になつてようやく喋つた高畠教諭。

なんだ？ 餅と鞭のつもりか？

「自分達が優位に立つてゐるとしても思つてゐるのか？」

『正義』だのなんだのと言つておきながら結局最後には自分の都合を優先する。決して自分の信念、信条のために力を奮わない。『正義』という言葉に酔つてゐるだけ。そして何より……

「人に武器を向けるとこ」とは『覚悟』はあるんだろ？

自分が『殺される覚悟』、自分が『殺す覚悟』。それがないなら武器を持つな。

「『正義』と自称しておきながら貴様ら魔法使いは何をした?」

『正義』を掲げ、人の意志を都合よく扭曲げる。

「『正義』なら何をしても許されるのか？自分達の価値観を押し付け、相手の意志はおろか、記憶すら改竄しても……！」

記憶はその人の人生そのもの。その改竄は人生を否定する。他者の人生をいとも簡単に搾取する大馬鹿者がこいつらだ。

「貴様らの結界によつて苦しんでいる女の子がいるのを知つているのか……！」

貴様らが長谷川千雨のよつな少女を生み出した。彼女の心の傷は貴様らが造つた。

ああ……、ダメだ。抑えられない……

「貴様らのくだらない『正義』によつて殺された何の罪もない子供達がいることを知つていいのかつ……！」

俺の雰囲気が変わったことに驚いてるのか？

……だが、貴様らにそんな余裕はあるのか？

「覚悟はいいな……。なに殺しはしない。貴様らには……」

『絶望』を教えてやる。

## Episode 2 (後書き)

少し展開を早くしました。最初の『正義』の魔法使い達との衝突です。

ちなみに凛は感情が高ぶると口調が変わります。

凛はセフィロスの人生そのものを『体感』しているので、『死』や『力』、『覚悟』について自分なりの答えを持っています。

さあ、次回は凛 vs 「正義」の魔法使い。凛の圧倒的な暴力が……  
…？お楽しみに！

なぜ、こうなつてしまつたんだろう。さつきまでは神代君の話を聞くだけだったのに、今では神代君と鬭つている。

確かに、いきなり呼び付けておいて一方的に話を持ち掛けた学園長のやり方に憤慨するのはわかる。

だが、それも神代君の正体がわからない以上、『仕方のない』ことだ。学園に危害を与える存在だったなら、確實に排除しなくてはならない。

そうしなければここに生徒達を守れないからだ。

神代君が帰ろうとしたとき、神代君を囲んでいる魔法先生、生徒たちがそれぞれ自分の魔法発動体を構えた瞬間……

神代君の雰囲気が変わった。

肌を刺すような怒気。叩きつけられる言葉。

いつみても僕はかなりの死線をかい潜ってきた。

『英雄』と呼ばれる『彼ら』の戦いを一番近くで見て、感じて、目標にしてきた。

その僕でも『わからない』。

しかし、これだけは言える。

『所詮中学生。侵入者としても簡単に対処できる』

これは大きな勘違いだ。

おそれく2メートル近くある長刀を手にした神代君を見て、僕は、  
高畠・T・タカミチは理解した。

――――――

「…どうした、俺が武器を持っていたら変か？あんた達はこれを予想していたんじゃないのか？」

正宗を左手に持った俺を見て狼狽する魔法使い。

「い、今、奴はどうからあの馬鹿でかい刀を出したんだ！？」

自分の眼で見えるものしか信じない、理解しようつとしない。自分達の『常識』がすべてだと信じている。

だからこそ、ありもしない『正義』に縋り付く。

そうすることじでしか『力』を使えない。

「あんた達が先に得物を構えた。そして俺はそれに応じた。ここから先は簡単。最後に立っていた奴が勝者だ」

そつ。勝者であつて、決して『正義』ではない。正義は勝つ？むしろ、勝てば宣軍。」ひらのほづが正しい。

「我ら正義の魔法使いが負けるわけがない！」

正義が勝つのではない。歴史は勝者によつて作りられる。だからこそ、勝者＝正義といつ回式が出来上がつた。

「魔法の射手・炎の15矢！」

「魔法の射手・雷の10矢！」

……牽制のつもりか？

「まる見えなんだよー！」

魔法の矢を正宗ですべて切り裂き、紛れて接近してきた奴を蹴り上げる。

「天照」

蹴り上げた奴に切り上げを追加。殺しはしない。だが骨の一、二本はもうつ。

「ガツ…！…！」

「一応峰打ちだ」

右腕の骨をへし折る。受け身なんか取れるはずがない。案の定、頭から落ちた。

「虚空…」

最初に魔法を放ってきた一人が標的だ。

「ど」見ている？」

どうやら俺の動きについてこれなによつだな。慌てて振り返っても遅い。

「……………」「……………」

両肘、両膝、ついでに喉も潰してやつた。声を上げることなく崩れ落ちる二人の魔法使い。

「くつ……外だ！奴の間合いに入るな。遠距離から魔法で狙い撃ちにしろ！――」

……その判断、『普通の剣士』を相手にするときは正しい。だが、俺は『普通の剣士』ではない。

「縮地」

斬撃は飛ばせるんだよ。……まあ、これは剣圧だが……。

「う、馬鹿なー?...ああああー?...」

これで五月蠅いのはいなくなつた。一いつは適当にあしらつておけばいい。

大事なのは、こいつら、魔法使いが認める『強者』を圧倒的な暴力で屈服させることだ。

『いつには敵わない』といつらの精神的支柱をへし折る。そして、  
と思い知らせる。

だからこそ…

「あんたも酷いもんだな…。高畠教諭。何を呆然としてるんだ? あんたがそんなんだから、ほら、見ろよこの有様」

酷い奴は四肢が動かず、声も上げられない。軽い奴でも利き手をざつくり斬られている。この傷は致命傷ではないが、あまり放つておくと失血死するかもな。初めての『痛み』で治癒魔法を使う気力すらないようだ。

「あんたが行動していればこんなことにならなかつたかもしれないな」

この高畠教諭を叩く必要がある。

この麻帆良学園においては、学園長が一番らしいが、人前でその力を見た者はいない。

一方、高畠教諭は『スメガネ』と呼ばれ、知名度は高い。それに『紅き翼』に同行していたこともあり、魔法使いにとつては、憧れでも

ある。

そして、何よりその強さは学園長さえ除けば学園最強と呼び声高い。

そんな高畠教諭が得体の知れない中学生に負けたら、いくら、頭の固い『正義の魔法使い』でも、嫌でも理解するだろう。

まあ、ここからが本番だ。

高畠・T・タカミチ。あんたは俺が『闘つ』に足る『覚悟』を持つているのか？



## Episodes3（後書き）

ちなみに、今回凛が使った技は以下のとおり。

天照

斜め下から上方に向かつて斬りつける。

縮地

複数の剣圧を飛ばして攻撃する中距離攻撃。追加で瞬間移動しての切り付けを行う。

虚空

高速ですり抜けて後に大量の斬撃を加える。

こんなところです。

やつとやる気になったか。

それに一瞬爺に田配せをしたな…。大方自分との戦闘を見て、俺の力を見極めるつもりなんだろ? だが、そう上手くいくと思ひなが?

「ポケットに手を突っ込んだままやるのかい?」

そういえば、高畠教諭は『無音拳』の使い手だつたか。

…つヒー?

何かが来る気配を感じて首を少し傾ける。すると何かが俺の顔の横を通り過ぎた。

「…まさか初見で避けられるとは思わなかつたな」

なるほど。今のが無音拳。ポケットを鞘代わりにして、高速の拳を打ち出す。そして今のは拳圧を飛ばしたのか。

噂に違わぬ実力ではあるようだ。だが、明らかに手加減してやがる……。思い上がるなよ。

「手加減できるよつた状況か？」八刀一閃

瞬動でもなんでもないただの脚力で肉薄し、一瞬で八撃引に入る。

「つー？」

しかし、これは紙一重でかわされ、距離を取られる。

「いい動きだ。だが甘い」

飛び退いた先に向かつて無数の斬撃を飛ばす。飛来する斬撃は地面を削り、高速で高畠教諭へと向かつ。

「△△△！」

不安定な体制だが、さつきよりも遙かに力強い拳圧によって相殺していく高畠。不安定な体制ながらもしつかりと反撃をこなすのは見事だが…

「獄門」

そつちばかり注意していいのか？

俺はおとなしく相殺するのを待つてやるほど優しくはない。

一瞬で頭上へと移動し、急降下。高畠の右肩に正宗を突き立てるが。わずかに体を捻られたせいで、傷は浅い。

「よく避けたな」

「（ありえない。あの速度で動くなら、何かしらの動作の予兆なり、魔力、もしくは気の強化が見えるはず…）」

「（まさか、高畠君がどうえられないとほの…。これはまちと旗色が悪いのあ）」

「考え方か？ あんたにそんな余裕があるのか？」

それぞれ思うところがあるようだが、知ったことか。結局相手の力も推し量れず、自分の身を滅ぼすだけだ。

「続けていくぞ？ 今度はさつきのようにはいかないぞ？」

俺の真骨頂はこの体の圧倒的な身体能力を生かした高機動戦闘。その真価を少しだけ教えてやる。

最初と同じように、一瞬で懷に潜り込む。そして横薙ぎ。当然この程度はかわされる。

俺に懷に潜り込まれた瞬間、高畠教諭は瞬動で俺の背後を取った。

「それは悪手だ」

俺に動きに遅れて、高畠教諭の背後から移動すると同時に放った剣撃が迫る。そのことに気づいた高畠教諭は更に瞬動を行う。

「見えてるんだよ。のりま」

その程度のスピードで回避できると思つた。瞬動した方向に、さりに剣撃を飛ばす。

「……」

瞬動で高速移動できるとはいえ思考が加速するわけではない。そのことを知らないわけではあるまい。

……だいぶ飽きてきたな。終わらすか。

「一閃」

身構え、突進からの斬りつけ。速度は俺の技の中でも最速。さつきの動きが見えなかつた奴に見えるわけがない。高畠の右腰から左肩にかけて斬り上げ、そのまま背後に駆け抜ける。そして、遅れて襲いかかる13もの斬撃。

一つ残らずその身に受けた高畠教諭は地に臥せた。峰打ちではあるが、おそらく全身いたるところが骨折を起こしているだろうな。

「あなたの部下はこの程度か？」

結局、この爺は高見の見物。今の戦闘で何をつかんだのかは知らんが、あの程度なら別に問題ない。こちらの手札はまだまだある。

「じゃあ、今度こそ俺は帰らせてもらひ。一応黙つておくれが、俺はあんたらが俺に突っかかるってこない以上、この学園に危害を加えるつもりはない。あんたらのくだらない争いに巻き込まれるのは止めんだからな」

俺の正体は話すつもりはないが、この程度は言つておかないと面倒になりそうだしな。どっちにしてもこの爺が部下達を押さえられなければ、俺を危険分子として何かしらの行動を起こしそうだが……まあ、そつなつたらそつなつたで『排除』すればいいだけ。

「せこせこ、部下達が暴走しないよう上手く手綱を握るんだな」

……反応はなし。どうせうへでもないことを考えてくるんだりつな。

わて、帰るか。しかし、俺もまだまだだな。もう少し自分の感情をコントロールできないとな。

――――――――

「すいぶんと面白い小僧がいるもんだな…。あの年でなかなか歪んでいる。そして何より、奴からはこの600年生きた私ですら知らない何かを感じる。あの小僧を上手く使えばこの忌まわしき呪いも……」

「ふむ…。どんなイレギュラーかと思たら、随分と変わった人みたいだネ。学園の魔法使いとは違うみたいネ。これは、一度接触する必要がアルネ。私の計画の障害となる存在か否かを確かめるためにもネ…」

俺は、この戦いを見ていた一人の人物に気づいてはいた。しかし、特に注意する必要はないと判断した。

……結論的に、この件がきっかけで、俺は忌まわしき『魔法』と本格的に関わりを持つことになつたのは言うまでもない。

## Episode 5

### 『神代凜に関する推察』

神代凜。 麻帆良学園男子中等部一年A組所属。 なお部活動には所属しておらず、 麻帆良学園近郊の高級マンションの一室で一人暮らしをしている。

学園での成績は非常に良好。 入学以来トップをキープ。 教員（一般教師）からの信頼も厚い。 魔法関係の教員達からは、 あの一件以降敵視にも似た視線を受けているものと思われる。

その日本人とは掛け離れた容姿と、 幽玄な雰囲気から女子生徒からの人気はかなりのもの。 しかし、 本人は特に気にする様子は見られない。

パーソナルデータは、現在の生活ぶりからも天涯孤独の身と思われるが、過去のデータが『皆無』なため、判断しかねる。

なお、魔法使いに対して好意的な感情を抱いてないことは明白であるが、こちら側に引き込める公算は五分五分といったところだろうか。

しかし、それでも彼を引き込むことができれば私の計画も盤石なものとなるだろう。

やはり、特筆すべきは彼の戦闘力。

彼は、あの高畠・T・タカミチを圧倒した。手も足もでないとまさにあの光景を指すのである。

確かに、高畠教諭も全力ではなかつたかもしけない。しかし、彼が  
まったく知覚できない、剣速と移動速度。

魔力も氣も使わずそれを可能とする脅威的な身体能力。

例え、人類がその身を限界まで鍛え上げても、あの領域には決して  
到達できない。

となると、考えられる可能性は神代凜は『人類』ではない、という  
可能性。

エヴァンジエリンのような最強種かもしれない。

もししくは……

『私の時代』でかるうじて物質の転送魔法が実用化されているぐら  
い。どちらの手段にせよ、それは『この時代』の魔法、科学ではありえ  
ない。

そうなると、考えられるのは転送魔法。もしくは、あの刀を質量を  
ゼロにして分解。そして刀を使用する際に質量を構築する。

彼はあの刀を何もない場所から取り出した。暗器の可能性も考えら  
れるがあの長さはありえない。

問題だ。

いだ。ましてや物質の質量をビツビツあるのは机上の空論だ。

「……興味が尽きないのはこのことをこうのだろう。何にせよ、彼から直接話を聞かないと始まらないね。」

「超さん、まだやつてたんですか？」

「む…、ハカセか…」

「頑張るのはいいですけど、やりすぎは駄目ですよ」

「それはハカセにも言えることね」

ハカセも一睡もせず研究室に籠つてゐるときがあるからお互こさまね。

「うん？… また彼ですか？」

「そう。彼の存在は私の計画を左右するかも知れないね」

彼が味方になれば強力だが、敵に回れば厄介極まりないね。ただでさえ、計画実行の日には『英雄の息子』も麻帆良にいるのに。

「確かに、神代凜さんでしたっけ…？茶々丸の話だと、エヴァンジェリンさんも彼に興味を持つてるみたいですよ？」

それは初耳ね。……エヴァンジェリンの目的はおそらく呪いの解除。エヴァンジェリンは彼に何を見たのか知らないが…

「……ハカセ。明日、私は彼に会つてくるね」

エヴァンジェリンが興味を持つなら、尙更彼の正体を知る必要がある。

そうだね。明日の放課後に行こうか。幸い、彼のマンションの場所は知っているしね。

私は「こんなとこ」で立ち止まるわけにはいかない。どんな手を使ってでも、計画を成就させる。

そのためなら悪魔にだつて魂を売り渡す。

「……連絡事項は以上。それと、明日から遅刻者への罰則が強化されるから注意しろよ。まあ、このクラスには遅刻常習者はいないから大丈夫だろうが」

担任による連絡事項が終わり、「これから部活動に所属している生徒たちはそれに参加し、そうでない生徒はそれぞれの時間を過ごす」とになる。

ちなみに俺は後者だ。

あの一件からちょうど一週間が経った。懸念していた学園側からの接触、もとい干渉がないところから察するに、学園長がとりあえずは抑えているのだろう。

嵐の前の静けさかもしけないけどな……。

やつこえざ、あれから変わったことが一つ。

どうこうわざか長谷川さんとメールのやり取りをするようになった。

それと、登校のときに一緒になることが多い。

もつぱひ、長谷川さんの愚痴を聞く形ではあるが、それで、少しでも長谷川さんのためになるなら、悪くはない。

「じゃあな、神代」

「ああ、またな」

一人、また一人と教室からクラスメイトが出ていく。俺もいつまでも教室にいるわけにはいかない。手早く荷物をまとめて、教室を出る。

さすがにマンモス学園。各部活動の熱気といつか、活気がすごいが、特に感じることもないでの、さっさと帰るに限る。下手に長居すると勧誘がつるせいからな。

「あつ！ 神代がいたぞ！」

「なにい！？」

「神代～！ 今日こそ返事を聞かせてもいいつづけ～。」

言つてゐるやばから見つかってしまった。

「三十六計逃げるにしかず！」

……」うつうのを力の無駄遣いつて言つんだらうな。

追いかけてくる人の群れを置き去りにして、俺は自宅を田指す。

――――――――――

なんとか？まあ、普通に自宅にたどり着いた。別にさつきのは日常茶飯事だから特に疲れたとかはない。

むしろ、あの光景を毎日飽きもせず繰り返す連中の気がしれない。  
そしてそれを見ても『異常』と思わない周りの生徒。

こんなところでも学園結界の影響がでている。その中心が俺なんだから笑えるな。

「…さて、とりあえず今日の晩飯なんにすつかな。……って誰だ？」

晩飯の献立を考えといったところに、インターフォンが高らかに響き渡る。生憎、俺には自宅に来るような友人はいない。となると、新聞かなんかの勧誘か？

インターフォンに備え付けのカメラで外を見る。

「この制服は女子中等部の……」

カメラの映像には一人の女子生徒が写っていた。その制服には見覚えがある。長谷川さんと同じ制服だ。

「それに、この子は確か…」

麻帆良の最強頭脳。超包子のオーナー。俺が言えた義理ではないが、なんでも超人、超鈴音その人だ。

俺、なんかしたか?……心当たりはないよつな、あるよつな。

……!

ああ、あの時見ていた二人のうちの一人か。何が目的か知らんが、話ぐらいは聞いてやるか。

「窓にてるか、上がるところよ。たいしたもてなしはできないが、  
お茶がらこませやうやう」

「……なりむ邪魔する所」

さて、超鈴音。君は俺に何を見せてくれぬ？



とりあえず、紅茶と茶請けの菓子を超鈴音に出す。そして俺はダイニングテーブルの向かいに座る。

「ふむ…。これはおいしいネ」

「そいつはおいしいわ」

そりゃそつだ。わざわざを取り寄せした茶葉だ。セレクトの安物と一緒にしてもらつては困る。

しかし、優雅に紅茶を飲むな。まあ、上手そつに飲んでくれるのが一番だしな。

「…さて、君はなぜ、俺のところに来たんだ？」

「神代さんに惚れてしまったからね。告白してきたネ」

「冗談はその辺にしとけ。あんただろ？あのとき、俺を『観て』たのは？」

確信はあるが、一応、確認とかないとな。

超鈴音はカップを置き、一つ深呼吸をした。そして、俺を睨むよう見つめる。

「…そこまでバレてるなら、単刀直入ネ。神代さんには私の計画に協力してほしいネ」

なるほど。だから俺を『観て』たのか。俺の実力を把握し、それが自分の計画に有益なら取り込む。

となると、二つの計画とやらは、魔法使い達を敵に回すのだろう。だからこそ、ある程度の実力を持ち、かつ、魔法使い達とは距離を置く俺に田をつけた。

そして、どうしたものか。

とりあえず、自分の分の紅茶を少し口に含み、口内を潤す。

「まあ、計画に協力もなにも、あんたの計画自体何をするのかわからぬ状態では返答のしようがないとは思わないか？それと、隣のマンションの屋上からこいつらの様子を伺つてるのはあんたの仲間だろ？あまり褒められた趣味じゃないな」

『氣づいてないと思つたか？』

「……さすがネ。……もつこことよ艦臣さん。どうやら最初からバレてたみたいネ」

無線か？もしくは念話の類か……。

「……しなくなつたようだな。それで? あなたの計画といひはなんだ?  
?」

「…………」

無い。

話すべきか迷つてゐるのか? 本当に実現させたいならある程度のリスクは負つべきだ。それすら理解できなければ計画とやらは失敗するだろう。

「……私の計画は、現在秘匿されてゐる『魔法』を全世界に『認識』  
れやる」と云ふ

話したが……。

「その心は？」

「どうやってそれを為すのかは聞かない。聞いたところで答えるはずがない。とりあえず目的がわかつただけでもOKだ。

「…心とは？」

「あなたがその計画を何のために実行するのか。それが聞きたい」

「…魔法という力があれば、今、この瞬間も苦しんでいる人々を救うことができるかもしれない。そんな力を一部の人間が独占してい るから、私がそれを世界に公表するネ」

「……それは嘘だな。あなたはそんな人間じゃない。あなたの行動 理由は、もつと別のところにあるはずだね」

「…………」

「違うか？違わないだろ。確かに魔法という力が公表されればあんたが言った通りになるかも知れない」

それも事実。だが、現実はそんなに甘くない。

「だが、そうなればただでさえ増長している魔法使いたちがさらに増長する。極端な話、世界は魔法使いによって統治されるべきとか吐かしてね」

かなり高い確率で魔法使いによる選民思想ができるだらうな。もし  
くはその逆。

「そうならなかつたとしても、魔女狩りの再来かもな

人は自分達とは異なる存在を簡単には認めない。むしろ弾圧、排除  
する。

「それを理解できないわけではないだろ??.」

「…私の計画が成就したあと全世界で起じつつある可能性に対処する  
だけの技術と財力は準備してるネ」

「立派な心掛けだが…、そこまでする目的が世界のためとかりえない。あんた自身にそりしたい、そりしなければならない理由があるからそりするんだ」

ただ純粹に世界を救う。」こんなものはありえない。言葉遊びになるが、世界を救うといつのは目的であって、行動理由ではない。

同様に、超鈴音の魔法を世界に公表するといつのも最終的な目的であって、超鈴音の行動理由ではない。

「あんたの行動理由はなんだ？」

「…それを話せば協力してくれるのかナ？」

「…わあな…。少なくとも、あんたへの信頼度は多少あがるかな」

「…ふむ。なら神代さんの行動理由とやらを話して貰るのが条件ネ」

「…やうべのなら、お引き取り願おう。俺に大した行動理由はないよ」

強いて言ひなら我が儘か…。覚悟はある。だが、俺がこの力を奮つのは、高尚な目的のためではない。ただ、俺の思いを貫くためだ。

「どうりで以上は望めないよ」

まあ、そうだね。俺は魔法が公表されようがされまいが、ビリでもいいしな。

「…気が変わったら、ここに電話するといいネ。盗聴等の可能性はゼロだからネ。まあ、私としては神代さんには是非、私の計画に参加してほしいネ」

椅子から立ち上がった、超鈴音はポケットから名刺のようなものを取り出し、テーブルに置いた。

「紅茶、おいしかったネ。よければウチの屋台にもくへるネ。歓迎する」

「ああ。気が向いたらな」

とりあえず、わかつたことはひとつかな。

超鈴音。こいつは多分、『この世界』の人間ではない。いや、むしろ『この時代』の人間ではない……といったところか。

こんなことを、超鈴音を送り出しながら俺は考えていた。

## Episode 7 (後書き)

ちょっと強引だったかな?

次は会談を終えた二人の様子を描きます。

「どうだった？」

「…全くダメだネ。相手にすらそれなかつたネ」

あの見透かされそうな瞳。自然で無駄のない所作。こちらの思考を  
読まれているような的確な言葉。

「正直、初めて見るネ。あんな人は」

私が言えた義理ではないが、あれほどの話術をどうぞ身につけたのか。私と同い年とは思えないね。

「それで？真剣はどう感じたネ？」

「そりだね…。正直相手にはしたくないね。さつきも気配は消していた。それに彼はこちらを気にするそぶりも見えなかつた。なのに彼は私に気づいた」

確かにそうネ。一応、真名には魔力や気を擬似的にゼロにして気配を消す、魔法符による結界を張つてその中に待機してもらつていた。

「それに彼にはどんなに銃弾を撃ち込んでも無駄になりそりだしね」

「確かにそうネ。…しかし、彼の協力は欲しいネ。なんとかして協力を取り付けることができないかな?」

せめて、彼の情報がもう少しあればいいのだが…。

私の『知識』には彼のような存在は、この麻帆良にはいなかつた。

私というイレギュラーがこの『時代』にきたから彼というイレギュラーが生まれたのか。

世界の意思、世界の修正力。そういうものが働いているのか。

結論はわからない。

しかし、彼の動向には注意しなければならない。

個人の力が世界を変える。

ありえないことだが、彼はそれを成しうるかもしれない。

その力が味方につけば心強い。

だが、その力が私に牙を向けたら……。

……まずは情報だ。彼には味方にならずとも、こちらに敵対しない確約がほしいね。

そのためにも情報がいるね。

――――――――

「超鈴音か……」

カップと皿を力チャ力チャ洗いながら一人呟く。ある意味想像通りで、ある意味想像以上の人物だった。

少なくとも、あれだけ交渉に長けた中学生はいないだろう。それこそ、あれは国のトップとかもやれそうだ。実際、会社のオーナーやつてるし……。

俺の場合、『セフィロス』の知識があるからああやつて上手く、こちらの流れで会話を持つて行けただけ。

それがなければ彼女にベースを握られてただろう。

ああ見えて、なかなか過酷な『世界』を生きていたのだろう。

「魔法を世界に公表する。それに伴って、世界で起こりうる可能性に対処する技術と財力を用意している…」

はつきり言おひ。これは明らかに『異常』だ。魔法を世界に公表したときに起じる問題は『予想』はできる。さつき俺が言つた通りだ。  
しかし、それに『対処』はできない。あくまで予想は予想に過ぎず、  
実際は、現実に起こったことに逐一対処していくしかない。

考えてみてほしい。ある事故が起きた。それが起こる可能性がある

ここには気づいていた。だが、その事故の対処にはもたつく。対処法も考えていたが、実際に起こつて見ると、自分達の想像とはかなり違っていた。だから対処ができない。

これが典型的なパターン。これから先、起こりうる可能性に対処する技術というのではない。あるとすれば何が起こるかを事前に知つておく必要があるが、人間には未来はわからない。だからこの先起こる事態に対処できる準備なんかできないのである。

しかし、超鈴音はそれができるといった。技術と財力を用意した。

これすなわち、超鈴音がこれから先に起こる事柄を知つていて示している。

ここまで理論を開拓できれば自ずと『超鈴音は未来人』という仮説にたどり着く。

「おやべへ、超鈴音は俺がこの仮説にたゞり着くであらひ見越し  
てるな……。喰えない奴だ」

なんか、厄介なのに目をつけられたな……。今後はいろいろと気をつ  
けて生活しないとな。

『普通』で『異常』な日常。

自分でもかなりおかしいことを言つてるのは理解している。だが、事実である以上仕方ない。

「これならイケるでしょ？」

「どうだろ？ 高畠先生は手強いしなあ……」

教室の入口にトラップを仕掛ける、どう考へても小学生のような外見の双子姉妹。

「マスター……。そろそろ高畠先生が来ますよ」

「ああ……。放つておけ。タカミチなら問題ない」

明らかにオーバーテクノロジーなロボット。『麻帆良の外』ではまだロボット開発は、よひやへ一足歩行ができるようになったばかりだったはずだ。

それに中学生とは思えないような体をした連中もある。グリビアアイドルも真っ青つてやつだ。

ほかにあげればキリがないから割愛するが『異常』だらけだ。

しかし、これが私のいる麻帆良の『日常』。どう考へてもおかしい。

だが誰もそれが想わない。おかしいと思いつてこるのは私だけ。

『まあ普通にこのひとを周囲に訴えた。

『え？ おかしくないでしょ。普通じゃん普通』

しかし、相手にされなかつた。むしろ私がおかしいとさえ言われた。

それが原因で私は人に對して一定の距離をとるよつになつた。

ネットを始めたのもある意味、これがきっかけ。

このまま、『普通』を『異常』と感じつつも、それが麻帆良だから『普通』なんだと自分に言い聞かせる毎日を過ごすものだと思っていた。

しかし、人生何が起きるかわからないものだ。

あの日、私はいつも通り登校していた。

ある交差点を横断していたらトラックが猛スピードで私に向かって

きた。

ブレー キがけたたましく鳴り響く。それに対抗するように私もおそらく初めて叫び声というものあげた。

目を開けるとそこには太陽を背に、腰まである銀髪を煌めかせて、私を抱えている同じ年ぐらいの男の子がいた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……」

予想外の『異常』な光景にろくな反応が返せない。

そんな私を尻目に銀髪の男の子はトラックの運転手を問い合わせている。

久しぶりに見る『普通』の光景。

トラックに轢かれかけたことなんかどうかに飛んでしまった。

その後、他愛もない話をしながら学園まで登校した。彼も私と同じだ。麻帆良の異常を異常と認識できる人間だ。

自分と同じ人間に会えたからか、今までの鬱憤を晴らすかのように愚痴を今日初めてあつた彼に話してしまった。

でも、彼は嫌な顔ひとつせず黙つて話を聞いてくれた。そして最後に、彼の名前を聞いた。

「神代凜だ。女みたいな名前だが、れつきとした男だよろしく」

これが彼と私。神代凜と長谷川千兩の出会いだった。

私の『異常』で『普通』な日常が変わった瞬間でもあった。

## Episode 10 (前書き)

遅くなりました

## Episode 10

銀行強盗。

「」の言葉を聞いて世の中の人々はどうこつたことを考へるだらうか。

刑法236条「暴行又は脅迫を用いて他人の財物を強取した者は、強盗の罪とし、五年以上の有期懲役に処する」

現行法上の強盗の規定はこうなつてゐる。しかし、今現在俺の田の前で繰り広げられてゐるのは『魔法』による強盗だ。

これは暴行でもないし、当然脅迫でもない。とすると、強盗にはならないのだろうか？

：別に刑法について論じるわけではないが、俺の田の前で繰り広げられる光景を見て、ふとこう思つてしまつた。一応言つておくが現実逃避をしているわけではない。

まあ、その、なんだ。俺は今銀行強盗に巻き込まれてゐる。

一日の授業が終わり、生活費を下ろして銀行に行つたんだが、突然銀行内に霧が充満して俺を除いた行員・客は皆夢の中へと旅立つた。

当然俺はレジスト・無効化した。まあ、俺が座っている位置が銀行の隅っこだったので犯人グループは気づいてないようだ。

結局犯人達は俺に気づかないまま、おそらく金庫？を物色しに奥へと進んでいった。

「とりあえず、警察に連絡しておくか…」

魔法を使う犯人に『表』の世界の警察が何かできるとは思わないが、呼んでおいて損はない。

え？俺が解決しないのかって？

：あり得ないね。これは麻帆良のいたごと。犯人が魔法を使つてゐるところから勘案するに、関東魔法協会に所属する魔法使いの可能性もある。

自分の尻は自分で拭けと言いたい。

だからこそ俺は何もしない。せいぜい警察に連絡するくらいだ。あとは好きにしてくれればいい。

「とりあえずATMで金を下ろして帰るか」

銀行内に設置してあるATMの前に立ち、キャッシュカードと通帳を入れ、暗証番号を入力しようとしたその瞬間、どつかで見たことがあるガングロースーツと制服姿の女子生徒が銀行に入ってきた。

「…俺は今日厄日か？」

そう呟かずにはいられなかつたが、別に手を止めることなく、暗証

番号を入力して向こうへ一月の生活費を下ろす。そしてお金を財布に入れて銀行を後にするが…。

「ちよっとあなた」

チッ…。やっぱりか。

「あなた、ここで銀行強盗が来ているのを知っているのですか？」

「…もちろん。俺の目の前で起つたからな。ちなみに犯人は奥に行つたぞ」

「そこまで見ているのにあなたは犯人を見逃したのですか！？」

あー…うぜえ。こいつは典型的な正義馬鹿だな。

「俺は金を下ろしに来た。銀行強盗を捕まえにここに来たんじゃない。勘違いするなよ？俺はこいつらがどうなつても知ったことではない。お前らがやりたいようにやればいいだろうが。崇高な自己犠牲の精神でな」

人はそれを自己満足と呼ぶ。

「なんでもかんでも自分の価値観を押ししつけるな、偽善者。お前の  
価値観なんざちひつけなもの。それが常識だと思つな」

ぐだりん。『れだからこいつらは嫌いなんだよ。言つたいことは言  
つたし帰るか…』

しかし、今日はついてないな…。せめて明日は今日よりもしな一日  
になることを願うとするか。

## Episode 10 (後書き)

特に取り留めもない日常風景かと思っちゃ.....

次回の更新をお待ち下さい。

「どうだ？」

俺の目の前に紅茶が置かれる。

そして田の前には金髪幼女が踏ん返り返るようにならって俺を踏みすりよけに見ている。

そして、紅茶を出してくれた少女？が金髪幼女の後ろに控える。

なんだこの状況。俺の日常は壊される運命にあるのか？

一度お祓いしてみようかな…。無駄だが…

「それで？ いきなり人を呼び付けるなんてあんた何様だ？」

「ほう…。その口ぶり、私が誰か分かつての言葉か？」

とても外見に不相応な尊大な口調で喋るこの幼女。

その正体は魔法使いの世界では知らぬ者はいないほど有名な『悪』の魔法使い。

『ヒュアングェリン・A・K・マクダウェル』

600年は優に生きている真祖の吸血鬼。

闇の福音などの二つ名を持つ元600万\$の賞金首。

しかし十数年前に当時日本を訪れていたナギ・スプリングフィールドによつて封印された魔法使い。

まさか関わることになるとは思わなかつたな…。

「情報は武器だからな。あんたが俺を観察してたのも知つている」

そこその後ろの少女があの夜以降、何かと俺の周囲をうろついていたしな。

「何が目的だ？」

こいつは超鈴音とは違う。超鈴音はある種、世界のためとかいう理由が垣間見れたが、こいつはまさしく自分のためだけに行動している。

超鈴音も突き詰めれば、結局自分のためということになるが、それでも根本的な部分は違う。

「そんないしたことではないさ。ただ貴様の正体を知りたくてな……。人間よりも遙かに長いときを生きてきた私でも貴様のような人間は初めて見る」

「当然だ。そもそも『この世界』に存在するはずのない力を宿しているのだから。

「…俺を利用するのか？」

「利用とは心外だな。私にかけられた忌ま忌ましきこの呪いを解くのに協力してもらいたいだけだ」

協力…ねえ。

「…無理だな。協力するメリットも、義理も、理由もない。何よりくだらないな」

「くだらないだと…！」

「へえ…。さすがは闇の福音。なかなかの威圧感だ。

「ああ、くだらないね。俺にとつては所詮他人事。勝手にくたばればいい」

だいたい『悪』とか自称してるのが馬鹿馬鹿しい。正義とか悪は言葉遊び。血口を正当化する方便にすぎない。

そこをあえて『悪』と名乗り自分を正当化しない。

それは自分は悪いと自覚しているように思えるが、それは違う。

この闇の福音は『悪』といつも葉で逃げ道を作っているにすぎない。

600年。この長い時を生きるに当たってかなりの人数を殺したのだろ。賞金首だしな。

しかし、その度にこいつはいたのではないかどうか。

『人を殺したのは私が悪だからだ』と。

悪だから人を殺す？だつたら『立派な魔法使い』の代名詞とも云える、紅き翼も大悪党になるだろう。

人を殺すのに正義も悪も関係ない。

正義とか悪とかいう言葉は、人を殺した自分の精神を正常に見せ掛けるための仮面だ。

人殺しはどこまでいっても人殺し。そこに正義や悪が介入する余地なんざ微塵もない。

そういう意味では、こいつは脆い。精神は肉体に引っ張られるというが、見た目幼女のこいつも、多少はあるのだろう。

特に今回のような我が儘なんか特に。

「いやなくだらない」と俺の貴重な時間が潰されたのか…

俺をこれ以上ないぐらい睨んでくるが知つたことか。

「じゃあな。せいぜい足掻けよ』か弱い吸血鬼さん』

やつぱ、魔法使いはくだらない奴ばかりだな。

自分勝手で他人の都合なんかお構い無し。

―― 消えてくれないかな？ その方が世界のためだと思いつけどな。

## Episode 1-1 (後書き)

感想を頂いた方々。この場を借りてお礼をさせていただきます。

できる限り返信をしようとは思いますが、できないこともあります  
のどう了承下さい。

突然だが、一月日が流れるのは実に早いと思わないか？

かれこれ季節は過ぎ去り、寒さもだんだん厳しくなってきた今日この頃。

街はクリスマスマード一色となっている。もちろん麻帆良学園都市も例外ではなく、路面電車などもそれ用の装飾が施されて実に煌びやかな感じである。

恋人達は聖夜を愛しき人と過ごし、恋人のいない者達はやけになつて同類と寄り合つ、もしくは家で引きこもる。天国と地獄が明確な一日。それがクリスマス。

さて、かくいう俺はどうなのか？

そこは想像にお任せすると言いたいところだが、ここは正直に言おう。

俺には予定が入っている。相手は長谷川さんだ。

麻帆良ではクリスマスに合わせて様々な催し物が開かれる。

それに一緒に行かないかというわけだ。

そう。パートである。

とまつても、まば毎日と言つていいほど一緒に登校しているから、別段パートでこつまじでもないのかもしれないな…。

しかし、時期が時期だけにそれなりに気合を入れないといけない。

「実際プレゼントも買つたし、門口までやる」とはないんだがな

金に糸目はつけない。…と言いたかったが、たかが中学生がそんな高級品をプレゼントしては相手、つまり長谷川さんも遠慮してしまうだろ？。

だから、ちょっと頑張れば手の届くお値段に設定して、各種情報誌等を参考にプレゼントを購入した。

俺自身、特定の人物に対してプレゼントを贈るといつのは初めての経験である。

孤児院の時には、ただみんなでクリスマスを祝うだけで、プレゼントを買う、もしくはもらうなんて余裕は無かった。

そんな俺だから当然女の子に何かをあげるなんてのも当然初めての経験である。

こんなことを言つたら、そもそもこんなに親しくなつた女の子も初めてである。

「なんにせよ、気に入ってくれるといいけどな……」

なんとなく空を見上げ、一人呟いてみる。

最近は特に麻帆良側からのアクションもない。闇の福音も静かなものである。麻帆良のデータベースの方も、わずかではあるが、一般人が魔法使いのゴタゴタに巻き込まれたらしいが、その他はさしあたって大きな動きはない。いわゆる『いつもの麻帆良』だ。

「お、雪か…」

見上げた空から、ぱらぱらと雪が舞い落ちる。

……ホワイトクリスマスか。悪くないな。

――――――――

「眠れねえ……」

女子寮の自分の部屋にいる私は『気』が『氣』でない時間を送っている。原因? そんのは決まってる里田のデータだ。

布団に潜り込んでからじめじめと蓋つが全く眠れる『気配』がない。

「……遠足が楽しみで寝られない小学生みたいだな」

そしてなんとなく天井を見上げては彼・つまり神代凜のことを考え  
る。

あの日以降、神代とはよく一人で登校している。自分で言うのもな  
んだが、麻帆良に来てから、一番仲良くなつた人物だ。

最初はとりとめもない世間話しかできなかつたが、次第に私も普段  
思つてることを口にするようになり、最近では愚痴も聞いてもら  
つている。

彼と、神代ところどけ、いつなんて言つたか安心できるへつてこいつのか  
素の自分でいられる。

そして、気がつけば毎朝の登校が楽しみになつてゐるのが現状だ。

「私は……」

ふとあることを考えて、自分の顔が熱くなっているのに気づく。

確かに、神代は誰が見てもイケメンと答える容姿をしている。実際、  
麻帆良学園女子中等部に密かに？流通している、『麻帆良学園男子  
中等部 人気ランキング』なるものにも上位にランクしている。

それに私が知る限り、ここ麻帆良において、私と同じくここが『異  
常』だと理解している人物。

なんだかんだ言つたつて、私も立派な？女子中学生。誰かとの色恋  
沙汰に興味がないわけではない。だが、周囲の環境がそれを許さなか  
つた。

そんなところに現れた、私と同じ感覚を持つ男子生徒。何かと気にかけてくれる男子生徒。そして気づけば一緒に登校するようになつていていた男子生徒。

いつの間にか私の生活の根幹に関わるようになつてしまふ。

…ギャルゲーなら十分すぎる好感度だ。

神代が私のことをどう思っているのかは知らない。だが、私は少な

くとも神代に好意を抱いている。これは間違いない。

なら、この想いに従つて行動するのが私らしい。これまでのようつ  
感情を隠すことなんて神代には必要ない。

神代には『本当』の私を見てもらいたい。

「よしー覚悟は決まった。あとは寝るだけだ

このときの私は気づかなかつた。

生まれて初めてのデートに何を着ていくか決めて無く、明日の朝  
パニックになることを…。

## Episode 1-2 (後書き)

感想を下せられた皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

クリスマス当日。昨夜から降る雪はやむことはなく、一種の幻想的な雰囲気を醸し出している。

待ち合わせ場所は世界樹前広場に午前10時。俺は当然待ち合わせ時間の30分前に到着。悠々と長谷川さんを待つている。ふと周りを見渡すと、俺と同じように誰かを待っている人達であふれかえっている。こんな人混みの中で待ち合わせというのも、本当に待ち人を見つけられるのか不安な面もあるが、幸い俺の姿はこれ以上なく目立つのでその心配はないだろう。

逆にこの姿で見つけてくれなかつたらなんかショックを受けそうだ。

周囲の人達がそれぞれ待ち人と一緒にイベント会場へと歩き出す。時刻は9時50分。約束の時間の10分前になつたところで、俺の待ち人も到着だ。

「おせよひ」

「ああ、おせよひ」

「…待つた？」

「それほどじやなこわ。俺もやつて来たといひだしね」

「これより、よく似合つてこるよ。特に髪を下ろしている姿は初めて見るね」

「あ、ありがと」

「正直滅茶苦茶かわいい。服のセンスはもううん、普段は後ろで一つにまとめている髪を下ろしているので全然雰囲気が違つ。普段もうすすればいいと思つたが、それを口に出すことはない。そのあたり

は心得ている。

「それじゃあ行こうか。だいぶ人も集まっているみたいだしね」

世界樹前広場から伸びる大通にはすでに人が多く集まっている。通りに面する店からは威勢のいい声が響いてくる。

俺たち一人も一緒にその中へと向かう。今日といつ一日を楽しむために。

ホワイトクリスマスとなつた今年の12月25日。この日は私にとっても特別な一日になりそうだ。今までのクリスマスは特に普段と変わることなく、部屋でネットをしたりと、『異常』な『日常』のひとつにすぎなかつた。でも今年は違つ。隣にいる神代のおかげで『普通』な『日常』となつた。

恋人というわけではないが、想い人とのデートを楽しむクリスマス。昨夜はなかなか寝付けなかつたが、今朝はその分寝坊するわけもなく、むしろ普段より早く起きられた。

…結論からいうと早起きしてよかつたと思う。でないと待ち合わせ時間に遅刻していた。問題が起こつたのだ。そう、着ていく服を選ぶという問題が。

私自身コスプレを楽しむのもあってファッショニは好きだ。ただ、それを着る機会がなかつた。学校ではできる限り他人との接触を避けたから誰かと遊びに行くこともない。かといって一人で外出するのにバシッと決めるつもりもない。

だからこそ、デートに着ていく服で悩んだ。普段のような服を着ていつてはおそらく、神代の横に並んで歩くには見劣りするだろう。となると、思い切つて決めていくしかない。でも人前にソレを着ていくことに恥ずかしさも感じる。

そんな感じで悩んでいたらいつのまにか9時になつていた。本当に早起きして良かつた。

結果的に悩み抜いた末、私は一番のお気に入りの服を着ていくことに決めた。その結果は上々だ。神代の反応もいい。それに偶然とはいえ神代の服の雰囲気にも合っていた。

「へえ～ いろんな店があるなあ

通りを歩く私と神代。神代は物珍しそうに出店されている店を見ている。店を見ている神代とは対照的に、私は隣の神代が気になつてそれどころではない。

うつむきがちな視線を上げてみると私たちの前方を歩く男女が仲良く手をつないでいるのが目に入った。それを見て思わず私は隣を歩く神代の左手を見てしまつ。少し手を伸ばせばつなげる距離にあるそれ。とても男性の手とは思えないような綺麗な手。

雪がぱらついていることもあってか今日の気温は低い。そんな中、私も神代も手袋などはしていない。必然的に自分の手が冷たくなつているのを感じる。思わず、両手をこすり合わせてしまう。

……その時だつた。

「え？」

さつきまで店を見ていた神代がおもむろに私の右手を握った。優しく、それでいて力強く。

「ひつしたほうが暖かい。それに入が多くなってきたからはぐれないよつにね

私の顔をのぞき込みながらそういう神代。私がそうして欲しい、そうしたいと思っていたのがばれてしまったのか？

そう思わずにはいられなかつたが。そんな些細なことはすぐに吹き飛んでしまつた。右手に感じる神代の左手。あれほど冷たかつた右手が、今は暖かい。実際の温もりよりも遙かに暖かく感じる。それと同時に全身が熱く感じる。

まつたく ずるい奴だ。

……」れじやあ、まあ好きになるだらうが。

「ほら、あのクリスマス限定『麻帆良ケーキ』つてのは？」

「あれってケーキと呼んでいいのか？」

大通りを一人で歩きながら、いろいろなものを見た。神代が私の手を握つてからは、それまでの緊張が嘘のように消え、普段通りの会話ができるようになった。当然のことながら、今も神代と私は手を握つたままだ。

今神代が示したのは、どう見てもジオラマにしか見えないケーキだ。じ丁寧に麻帆良を再現したらしく、明らかに常軌を逸する出来である。

しかし、こんな異常なものを見ても今の私はどうとも思わない。それでも、ころじやないからな。今は楽しむときだ。それに神代が隣にいると、そんなものを見ても別に動搖もしない。する必要がない。私

はもう『一人』じゃないから。私と同じような人が、すぐ隣にいる。

「次はあの店がいいな」

「ああ、あれか。別にいいよ。時間はまだまだあるからな」

私が希望したのは小物が店の外まであふれている雑貨屋。確かに前に立ち読みした雑誌に特集が組まれていた記憶がある。かくいう私もこの通りを通りをたびにショーウィンドウを覗き込んでいた。可愛い生活雑貨が多く、単調になりがちな寮の部屋を飾るにはうつてつけのショップとも言える。当然この店も、クリスマス仕様になつている。

いざ、一人で入店するとそこは人であふれかえつっていた。

「多いな……。ここって人気店なのか？」

「ああ。雑誌で特集もされていたし」

「なるほど」

店の中は、外に比べてカップルは少ないものの、それを補つてあまりある女生徒でいっぱいだった。そして私は見つけてしまった。いや、普通に考えればこうなることは分かっていたはずだった。

「これかわええなあ）。明日菜はどう思つ？」

「いいんじやない。木乃香の好きなのでいいよ。私はそんなにこだわりがあるわけじやないしね」

「あかんで。明日菜にも関係ある」とやないの」

私のクラスメイト・神楽坂明日菜と近衛木乃香の一人だ。寮で一人は同室ということもあるので一人で買い物にでも来ているのだろう。

そうだ。麻帆良のクリスマスといえばこの大通りのショッピング。となると私のクラスメイト達もここに来ているかもしれないのだ。現に二人見つけてしまったし。

……いや、まてよ。この一人ならまだマシなほうか。あのアホ毛とパパラッチにこの現場を押さえられるよりは遙かにいい。

「あれ、あの子どうかで……？」

「うん？ どないしたん明日菜？」

「いや、あそこの一組の女の子のほうなんだけど、どっかで見たことがあるような……」

……まあいい。普段の私とは全く違う格好をしてるからすぐにはばれてないが、このままだと私だと気づかれてしまうかもしれない。こんなときは店から出るのが一番なんだが、慌てて出て行くと不自然すぎる。

「どうしたの？」

「…ちよつといつち」

神代の手を引いて商品棚の合間ができる限り自然を装いながら歩いていく。そして若干遠回りしつつだが、無事に店から脱出できた。その間神代は黙つて私に着いてくれた。

「…もしかしてあの二人組の子？」

店を出て 少しして神代がおもむろに尋ねてきた。なんだ ‘気づいたのか。

「長谷川さんの知り合いだつたの？」

「…クラスメイト」

これ以上神代が聞いてくることは無かつた。私の気持ちを悟つたのか、それとも聞くべきではないと思ったのか。神代の考えていることはわからないが、これも神代の優しさなのだろう。

：実にありがたい。仮に聞かれたとしても答えられる訳がない。單純に、神楽坂や近衛にこんな場面を見られるのが恥ずかしかつただけだし。

「それじゃ、気分転換に何か食べようか。お皿にもちよつい時  
間だしね」

そうこうして。今度は逆に神代が私の手をぐるぐる引っ張つていく。

「……ありがとう」

そう言わずにいるのがちがつた。神代は何も答えない。聞こえてないのか、それとも聞いてない振りをしているのか。

どちらにせよ、今は感傷に浸るときではない。今は田一杯楽しむとあだ。せっかくのクリスマス。どんなにした気持で過ごすなんてもつてのほか。それをこのままにして、今は神代と過ごせること感謝しよう。

「それで、どこに行く？」

「意外な穴場つてやつ。ちゃんと調べておいたから」

「へえ……期待してもいいのか？」

神代は笑顔で言い切った。『当然!』と。

そつか一なら思いつきり期待してやむづじやないか。

朝から降り続いた雪は未だに降り止まない。しかし、雲切れ目から綺麗な満月が覗いている。

現在、俺と長谷川さんは集合場所であつた世界樹前広場から少し離れた所にある、小さな公園に来ている。別に世界樹前広場でも良かつたのだが、あそこはまだ人も多い。

落ち着いて話すにはここがちょうどいいのだ。

「今日は楽しかった」

「俺も」

公園に一つだけあるベンチに一人並んで座っている。俺たちはあの後本当にクリスマスでにぎわう大通りを満喫した。事前に調べておいた、お昼を食べた店もなかなか良かつた。長谷川さんも気に入ってくれたみたいだ。その後も一人でいろんな店を見て回ったり、簡単なゲームにも参加したりした。

あの雑貨屋での雰囲気はなりを潜め、長谷川さんも終始笑顔であった。

うん。初めてのトークとしては合格点といったところかな。

「実はさ、俺、こんな風にクリスマスを過ごすのは初めてだぞ。だから今日は長谷川さんに楽しんでもらえなかつたらどうしようか不安だったけど、楽しんでもらえたなら良かった」

「私も…そうだ。今まで普通に部屋にいたし、そもそもこんな格好で外にでるのも初めてだよ」

うん。照れながら話す長谷川さんは実に可愛いと思う。これがいわゆるツンテレという奴なのか？普段の男っぽい口調が微妙に崩れているところがまた…。

「それにもしても、麻帆良の人間つてすごいね。たかがクリスマスであれだけ騒げるのだから」

「まあな。お祭り好きとしては騒がずにはいられないんだろうな」

こういつたとりとめもない会話もいいが、そろそろ時間も遅くなってきた。俺はマンションだからいいが、長谷川さんには門限がある。それに遅れさせてはダメだ。

男、神代凜。これより初めてのプレゼントを渡します！

俺は「マークの内ポケットにある長方形の箱を取り出す。当然可憐に  
しくラッピングされている。俺の手元を見て長谷川さんは驚いたよ  
うな表情をしている。

「メリークリスマス」

一言叫びて長谷川さんに渡す。壊れ物を扱つかのように受け取る長  
谷川さんを見て苦笑してしまう。そこまでするほどどの品物ではない。

「あ、開けてもいいか？」

「別にいいけど、あまり期待しないでくれよ」

慎重に包装紙を外していく長谷川。そしてその中身が露わになる。

「…綺麗」

俺がプレゼントしたのはネックレスだ。特徴的なのは淡く紫に煌めく水晶。

「…」れつて「アメジスト？」

「長谷川さんって2月2日が誕生日でしょ？だからアメジストを選

んでみたのだけ……」

2冊の誕生石はアメジストだ。ロードマーティン『誠実』や『心の平和』などがある。

「…あらがとう」

今絞り出すよつた顔と共に、今日一番の笑顔を見せてくれる長谷川さん。

「じりこたしまつて」

“おめでた！”プレゼントは上手くこなしたよつだ。良かつた…。

――――――

今日は本当に私にとって特別な一日であると心から言えるだひつ。  
日中のデータも楽しかった。これまで部屋に籠もってばかりいた自分  
が馬鹿に思えるほど。

それ以上に、まさかプレゼントを神代からもらひえるとは思わなかつた。しかも私の誕生石のアメジストのネックレス。

公園の街灯の光を反射して、淡く輝く紫色のそれは本当に綺麗だ。

「ほんと、神代って不思議な奴だよな」

「ははっ、それは褒めているのか?」

「でもさ、そんな不思議なやつだから、一緒にいると落ち着けるんだわうな」

あの日、神代が私を助けてくれなかつたら今日という日は存在しなかつた。私と神代がクリスマスにデートして、それでこんな綺麗なネックレスをプレゼントしてくれた。

「私はこれまで周りが普通に思つていることが異常にしか思えなかつた。そしてそれを周りに言つてみると、私が変なんだと、異常だと言われた」

だからこそ私は他者との「ミコニケーション」ができる限り避けている。一種の対人恐怖症だった。

だからこそ私は他人の顔が見えることのないネットの世界へと、自分の世界を広げていったのだ。

「最初はそれでも友達を作ろうとした。でも、私と同じように、麻帆良がおかしいという人は一人もいなかつた」

そして、気づけば私はひとりになっていた。

「神代が私と同じように、麻帆良が異常だと感じていると知ったときには神代も私と同じような境遇にあったかもしれないとは思ったけど、それ以上に嬉しかった」

私はひとつじゃないって思えた。だからこそ、ここまで心を開けたのだと思つ。

「私の愚痴も嫌な顔ひとつせず聞いてくれるし、今日もそうだったけど、私がしてほしいと思つたことをしてくれる」

普通に考えれば、神代の容姿は、昔の私なら異常だと言い切つていた。純日本人のくせに輝く銀髪。瞳はどことなく不思議な色をしている。けつして黒ではない。アルビノとも取れる。でも、私がそれを言わず、逆に積極的に関わりを持とうとしているのはほかでもない。

「私はそんな神代が好きだ。友愛なんかじゃない。一人の女として、神代凛という男が好きだ」

真剣に私の話を聞いてくれていた神代の表情が変わる。おそらく神代から見たら私の顔は真っ赤な茹で蛸のようになっているだろう。

でも、今日の本当の目的は私の思いを神代に伝えること。思い切って言つてはみたが、滅茶苦茶恥ずかしい。

「だから、私のことをどう思つてくれているのか教えて欲しい……」

神代の言葉が怖い……。告白なんか初めての経験だ。

「俺は……」

神代の言葉を聞いた瞬間、体がビクついた。不安や期待。様々な感情が私の心をかき乱す。

「俺は、こんなに親しくなったのは長谷川さんが初めてだ。そして、長谷川さんには友達に向ける以上の好意を抱いているのも事実」

心臓が跳ね上がる。だってそうだ。今の神代の言葉は私に恋愛感情を持っているということだ。

「…でも、少し時間が欲しい。長谷川さんの想いは正直嬉しい。でも、少しだけ時間が欲しい」

…時間が欲しい？

「言い方が悪かった。ちょっと俺の中で整理する時間がほしい」

当然といえば当然だ。いきなり告白したのは私。私が逆の立場でも即答はできない。

「分かった。じゃあ、そのときを待つてるから」

「それじゃ、今日は帰るよ。ありがと。これ大にするから

「ああ。ありがと」

こうして、私は寮へ足を進める。

神代の答えは聞けなかつたが、私は満足している。気持ちを伝えた  
らなんかすつきりした。それに、こんなにも素敵なプレゼントもも  
らつた。

寮へと向かう足取りも軽い。

私は、意気揚々と帰路についた。

私のことを空から見ている人物がいることも気づかずこ……

## Episode 15 (後書き)

携帯を打つ指が止まらない

故に連続投稿でした。

「俺が好き…か」

正直、驚いた。しかし同時に不安もある。長谷川さんは俺にその気持ちを打ち明けてくれた。だが俺はどうだ？

確かに長谷川さんの気持ちに答えたいといつゝ気持ちはある。実際俺は長谷川さんに惹かれているのだろう。

だが、俺は『普通』じゃない。誰よりも普通を求める長谷川さんの側に『異常』な俺がいてもいいのか。そもそも俺は隠し事だらけだ。

そして、何より俺の手は血塗れになっている。

長谷川さんの気持ちを否定する理由は存在しない。後は俺自身が踏み出すかどうか。

内心で葛藤を繰り返しながら、俺は家へと到着した。そして気づく、玄関のドアに茶封筒が挟まれている。

「差出人は不明。宛先も不明……」

見るからに怪しいそれ。確かめるように封筒の上から中身を確認するが、何か堅いものが入っているのがわかる。

誰が何の目的でこんなものを送ってきたのかは知らないが中身を確認しないわけにはいかない。封を破り、中身を出す。

「……」

出でた中身は淡く紫に輝くアメジストをあしらつたネックレス。見間違はずがない俺が長谷川さんにプレゼントしたものだ。

そして小さな紙片に『世界樹前広場 Eva』と書いてあった。

瞬間、ざわついていた感情が一気にクリアになる。そして思考が加速すると同時に俺は駆けだした。

「…迂闊だった。少し考えれば分かる事じゃないか…！」

闇の福音とやらを甘く見すぎた。その結果がこれだ。所詮封印されている人物としか認識していなかつた。奴の600年という経験を考慮しなかつた。奴にすれば一時的に呪いを弱める方法を知つてゐる。仮にそれをして、俺にとっては取るに足らない人物といつ評価が、この状況を招いた。

「何が誇りある悪だ。ただの小悪党だ」

ここ最近に起こっていた一般生徒が巻き込まれた事件というのは十中八九エヴァンジェリンが絡んでいる。おそらくその血を吸い少しづつ魔力を得ていったのだろう。

それに犯行の痕跡を消すぐらい造作もないはず。奴の側にいたあの

ロボット。あいつが麻帆良のデータベースを改ざんしたに違いない。内部犯行と思われるなどと記録されたデータを『偶然巻き込まれた』とでも改ざんしたのだろう。

俺はまんまとそれに引っかかったわけだ。しかも今日は満月。吸血鬼の力が一番高まるときだ。

奴の目的が何かは分からぬが、俺にその目的がある以上、長谷川さんに危害を加えるつもりはないだろう。あくまで俺をおびき寄せる餌にすぎないはず。だが、こうやって、巻き込んでしまった以上、話すしか無いだろう。記憶を消すなんてもつてのほかだ。

間違いなく、俺はエヴァンジエリンと交戦するだろう。話しかけて済ませるつもりは全くない。殺すつもりはないが、相応の代償は必ず『』える。

しかし、そうなるとまた別の問題が生じる。

学園側の干渉である。

俺の場合は魔力も気も使用せず、剣のみで戦えるがエヴァンジエリンはそうではない。しかも、封印対象が戦闘を行っているとなれば、学園の魔法使いは飛んで駆けつけるはず。

俺はその存在を知られているからまだいいが、長谷川さんはそうはない。学園側は彼女の記憶を消そうとするのは言つまでもない。

絶対にそれはやらせない。彼女の記憶は彼女のもの。それを勝手な事情で、魔法の秘匿とかいうくだらない理由で奪うのは許さない。

「潰す……」

「アーヴィングのアーヴィング、アーヴィングのアーヴィング……」

## Episode 16 (後書き)

今回はこれまで張つておいた伏線回収です。

なお、この事件が終われば原作に突入します。

薬味もやってきます。

「神代……」

世界樹前広場の最奥に長谷川さんが、そしてその横にエヴァンジエリンとロボットがいた。長谷川さんは拘束魔法をかけられているようだが、別段外傷は見あたらない。

「よく来たな……」

相変わらず尊大な態度でもってエヴァンジエリンが話しかけてくるが相手をする必要は皆無。

「大丈夫か？」

「「「「……?」「」」

刹那。俺は長谷川さんの目の前へと移動。地面に描かれている魔法陣に軽く手を触れ破壊。そして長谷川さんを抱えて小悪党から距離を取る。

「……」で大人しくしててくれるか？』

努めて冷静に言葉を発するが自分でも言葉の端に怒りが感じられる。

そして、持ってきたアメジストのネックレスに結界魔法を掛け長谷川さんに手渡す。これで戦闘の余波に巻き込まれることはないだろう。

「神代……どうなってんだよ」「これは……？」

「混乱するのもわかる。でもこれから起じる』とは紛れもない『現実』だ。俺に分かることなら後でいくらでも答える」

俺は決めた。長谷川さんには全てを話す。だが、今はのんびりと会話をするときではない。俺に説明を求める長谷川さんを制し、俺は再び小悪党と対峙する。

「今の動きはなんだ？」

答える義理もない。

「私が構築した拘束魔法陣を一瞬で破壊。やはり貴様はただの魔法使いではないな」

当然だ。俺は『化け物』だ。

「だが所詮は人間。私に敵うはずがない。どうだ？ 素直に私に協力するならばこの場は見逃してやる。その女の記憶もちゃんと元に戻してやる」

…それは俺の台詞だ。この場における強者は俺。貴様は弱者だ。

「…勘違いするな。見逃してもいつ、許しを請つのはお前だよ。誇りもなにもないただのクズ」

「…何だと？」

もはや問答は無用。俺の答えはここつを潰すことのみ。

「殺しはしない。仕置きをするだけだ」

「…いい度胸だ！この闇の福音に楯突いて無事でいられると思うな  
！…」

その言葉をきっかけにロボットと、エヴァンジェリンの背後から、  
メートルを越える刃物を両手に持った人形が飛び出してくる。

「キリングドール  
殺戮人形か…」

「キヤハハハハツ」

エヴァンジェリンの全盛期から行動を共にしている人形。エヴァン  
ジェリンの一つ名の『人形使い』はこいつからきているのだろう。

確かにこれだけサイズが小さい上に、この速度。熟練の戦士でも手  
こするだろう。地を這つように俺に接近し、直前で飛び上がり、大  
上段からの唐竹割り。

「……」

エヴァンジエリンが糸で操っているならまだしも、こいつは自動人形。人間と同じく空では方向転換などできない。つまり、

「格好の餌食だ」

正宗で一刺し。この人形が持つ剣と正宗ではリーチの差がありすぎる。向こうの間合いに入る前に、俺の間合いに奴が勝手に入つてくれる。ましてや、正宗は抜く動作を必要としないから、こういった不意打ちも可能。

直前で身を捩つてかわそつとしたその反応はすごいが、いくら身を捩らうとも正中線、体の体幹をずらすことはできない。

突き刺した正宗を抜き、刹那の四連撃でもって四肢を切断。最後にこいつが持っている剣で地面にその胴体を縫いつける。

うつて変わって肉弾戦を仕掛けてきたロボットも同様、向こうの間合いに入る前に、四肢を切断。ついでに上半身と下半身を真つ二つに分けてやる。

「チツ……！」

「『魔法の射手・闇の』……！」

「簡単に撃たせるとと思つたか？」

俺が従者一人を潰した直後、魔法の射手を放とうとしていたエヴァンジエリンに接敵。俺の移動は単純な身体能力。魔力も気も使わないがゆえに、察知がしづらいという利点がある。

「『断罪の剣』……」  
エクスキューショナー・ソード

俺の剣戟を右手に集めた魔力の剣でもって防ぐエヴァンジエリン。咄嗟の判断。そしてそれを即座に実行できる魔力運用と身体能力。この辺りはさすがといふべきか？

「しかし、あなたは剣の素人。素人に防げるほど俺の剣は甘くない」

……『一閃』。

虚実を交えた剣戟の最中、超高速でエヴァンジエリンをすり抜け浴びせる十三の斬撃。その全てがエヴァンジエリンの体へと吸い込まれ血しづきを上げる。

「私に傷をつけるか…」

この程度でどうにかなることは思ってはいないが、目の前でそれなりに深かつた傷が再生されると、改めて魔法つて奴のすごさを実感する。

「だが、この程度の傷。私にとっては致命傷にもならん。真祖の吸血鬼を舐めるなよ？」

「不死殺しでもないと無駄だつて言いたいのか？」

「フッ…。その通りだ」

分かつてはいたが厄介だな。おそらく魔力が尽きない限り、再生し続けるのだろう。封印状態で本来の魔力量でないとはいえる、それを尽きるまで攻撃し続けるのは正直、面倒だ。

となると、不死殺しの武器で攻撃するのが手っ取り早いのだが、生憎正宗は妖刀ではあるが不死殺しではない。

「……仕方ない」

「なんだ降参か？だが、我が従者をああしてくれた以上、その代償は払つてもううぞ」

手の内はあまり晒したくはないが、現状ではこれがベストだな。

「……『心ない天使』

「き、貴様……何を……！」

「やはり、『これ』は使えるな」

神代から碧色の靄のようなものが立ち上った直後、エヴァンジェリンが倒れた。その顔色はひどく悪い。医療知識のない私でもあれば瀕死、もしくはそれに近い状態だと理解できる。

「これはプレゼントだ」

倒れたエヴァンジェリンに対して、神代がその馬鹿でかい日本刀をお腹に突き立てる。端から見ると墓標に見えなくはない。残酷ともいえる光景だが、何故か嫌悪感を感じない。全く感じないとわけではないが、それ以上に私の中でしつくりとくる部分がある。

正直、今でも目の前の現実が夢ではないかと疑ってしまう。飛び交

う常識を越えた現象の数々。飛びかかる刃物を持つた人形とクラスメイトのロボット。

そしてそれを躊躇無く、日本刀で切り捨てた神代。飛びかかった二人?とは対照的に、その場から動かなかつたエヴァンジェリンも、瞬間移動でもしたのかと思うほどの動きをした神代に、同様に斬られた。

だが、驚くことに神代がつけた傷は、みるみるうちに治つていった。そしてエヴァンジェリンの口からは『吸血鬼』という単語が聞こえた。

：吸血鬼っていうのは確か、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』、シェリダン・レ・ファニユの『カーミラ』とかに登場する架空の存在のはず。生と死を超えた者、または生と死の狭間に存在する者、不死者の王と呼ばれ、凶悪な犯罪者の通称としても使われる。バンパイア、ヴァンピルなどとも表現される。

「空想の世界の存在じゃないのかよ…」

一般に吸血鬼は、一度死んだ人間がなんらかの理由により不死者として蘇つたものと考えられているらしい。現代の吸血鬼・バンパイ

ヤのイメージは、ヨーロッパの伝承に起源をもつものが強い。吸血鬼の伝承は世界各地で見られ、東ヨーロッパのバンパイアに加え、アラビアのグール、中国のキョンシー等がある。

にわかには信じられないが、あれだけの光景を目の前でまざまざと見せつけられては信じざるを得ない。なにより、神代が『これから起ることは全て現実』と言っていた。私が知る『空想』が今日の前で現実となつていて。

「魔法か……？」

目の前で起つた現象。これまで私が麻帆良で過ごしてきた中での『異常』な現象。その全てを説明するのにこれほどぴったりな言葉はない……はず。私が『異常』と感じているのに、周囲の人間がそれを『普通』と認識していたのも魔法が原因かもしれない。吸血鬼が存在するくらいだ。人の意識を誘導する魔法くらい普通にあるだろう。麻帆良七不思議にも挙げられる『魔法少女』『魔法親父』とかも、火のない所に煙は立たないというから実際にいるのだろう。あの馬鹿でかい世界樹もそれに関係するのか？……あの学園長の常軌を逸した後頭部も？

「……神代に聞けば全部はつきりするか」

私がいくら考えようともそれは想像・予想にすぎない。神代が全て話してくれると言つのだ。だつたら神代に聞けばいい。

神代がこちらに歩いて来ているのを見るとどうやら終わつたようだ。広場にはバラバラになつた人形とロボット。日本刀で杭打ちをされたエヴァンジエリン。『異常』な光景だ。法治国家日本・というより世界のどこを探してもこんな光景は田にする」とは無いだろ？

しかし何故だろ？

これだけのことをした神代に対する感情は以前のそれと変わらない。神代が私を守るために戦つてくれたからか？それとも私が神代に惚れているからか？

：：神代がいつも優げな雰囲気を纏っている理由が分かつたからか？

「立てるか？」

「うん」

「なら場所を変えよう。…そうだな、俺の部屋に行こう。そこで全てを話すよ」

「…アレは放つておいていいのか？」

「別に死にはしない。それに迎えも来るだろ？しね」

神代が私の手を取る。そして広場から立ち去ろうとしたが…

「動くでない！…」

学園長とその他数人が広場にやつてきた。ちらほらと知った顔も見える。どういう事かと神代を見ると軽く舌打ちをしていた。一方、学園長とその他大勢は広場の状態を見て目を見開いている。…当然の反応だよな。

「長谷川さん。そのネックレスをちゃんと持つてて」

そう言われて、慌ててネックレスを両手でしっかりと握りしめる。もしかして、このネックレスに何があるのか？

「これはお主の仕業か？」

「そうですけど、なにか？」

悪びれた様子もなく平然と神代は答える。逆に学園長と一緒に来た何人かはその答えに憤慨している様子だ。

「エヴァンジェリンが彼女を誘拐したので、俺は彼女を取り戻しただけ」

「それならこの惨状はどう説明する？」

「正当防衛……もとい仕置きだ。やり過ぎとも言うのか？別に普通だろ。第一、一般人を襲うような奴に、闇の大魔法使いとも呼ばれるエヴァンジェリンに対する仕置きとしては優しいものじゃないか？ああ、そうそう。刀には触れない方がいい。俺以外にはさわれないから。ちなみに後三時間は消えないぞ」

あれで優しいのか。十分すぎるよつた気がするが。…とこつかエヴァンジエリンはあのまま三時間も過ごすのか？

「事情とか聞きたいならエヴァンジエリン、もしくはそこのロボットの記憶を覗け。俺から話すことはない。ましてや田撃者たる長谷川さんに聞く必要もない」

「それはこちらが決める」

「関係ないね。俺のことは俺が決める。長谷川さんについてはあんたに任したらそれこそ都合のいい駒にされるか今夜の記憶を消すかの一択だ」

記憶を消す！？そんなことをされるのか私は！？

「冗談じゃない！私の記憶は私のものだ。勝手に消されてたまるか！」

「…本人がこいつている以上記憶を消すのは無理だな。ましてや長谷川さんは学園の認識阻害が効いていない。これはあんたらの責任だ。そのおかげで彼女の心は脆く、壊れやすくなっていた。これ以上の負担をかけることは俺が許さない」

神代が私の右肩に手を回して一際強く抱き寄せる。…思わず顔が熱くなる。

「それに気づいてないとでも思ったか?長谷川さんがいる2 - Aは意図的に関係者、もしくはその素養のある者を集めてるだろ。まるで誰かの為に準備しているようだ。……冬にくる『英雄の息子』のためかな?つまり彼のパートナーとなりうる人材を集めたというわけだ」

「……」

英雄の息子?今の時代に英雄なんていたか?神代が何を言つているのか私には分からぬが、学園長はピンときてゐるようだ。

「長谷川さんはどうする?」そのまま学園長の言つこよづに使われる人生なんてまっぴらでしょ?」

…未だに把握しきれない部分もあるが、おそらく神代と学園長は敵対、もしくはそれに近い部分があるのだろう。心情的なものかもしないが、私の今後に関わることを今、神代は聞いているのだろう。

「…私の人生は私が決める。誰かのいいように使われるのはごめんだ。それに神代から話を聞いてないしな。それに私は神代を信じる。得体の知れない学園長とその部下の世話になるのは嫌だな」

誰かの手のひらで動くのは嫌だ。しかも、これまで私が異常と感じ、周囲の人気が普通と感じていたのは学園長の仕業の可能性が高い。だとすると学園長には好意どころか嫌悪感しかない。トップの学園長がそうなら、現在この場にいる部下らしき人達も似たようなもの。

「なら長谷川さんは俺が守る。今回のよつた事は一度と起きないようにする」

「神代…」

「…聞いていたな？長谷川さんは俺が守る。学園側が彼女に手を出せば、そこに転がる連中と同じ道をたどつてもう一つ。ちなみにそこの闇の福音は、これ以降、俺もしくは長谷川さんに害意を抱いた瞬間、そのような状態、瀕死状態となる」

「お主…！」

「そいつがどうなるうと知ったことではない。その状態では真祖の吸血鬼の不死性もなくなっているから簡単に殺せるぞ？まあ害意を抱かなければ普通に過ごせるから安心しろ。あんたの思惑通りにそいつに彼の師匠になつてほしいのならちゃんと言い含めておくんだ

な  
「

……この日私は魔法という存在を知った。そして私が、真の意味で自分の人生を歩み始めたのはこの日なのは言つまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8526t/>

---

魔法先生ネギま！～片翼の天使の力を得た男～

2011年9月5日19時52分発行